

## 有識者との対話

2010年4月8日、コニカミノルタの環境への取り組みをテーマに、国際NGO ナチュラル・ステップ・ジャパンの高見幸子氏をお招きして、コニカミノルタホールディングス(株)CSR担当常務執行役 谷田清文以下、CSR推進部員(以下、KM)との対話を行い、さまざまなご提言をいただきました。(文中敬称略)



国際NGO  
ナチュラル・ステップ・  
ジャパン  
代表  
高見 幸子 氏

### CO<sub>2</sub>削減の施策について

**高見** 製品ライフサイクル全体でのCO<sub>2</sub>排出量について、総量での削減目標設定があることはすばらしいと思います(▶P17)。ただ、省エネ施策だけでは削減効果に限界がありますので、再生可能エネルギーへの転換も目標に加えてはいかがでしょうか。グローバルに事業展開しているなら、ある国ではコスト高になるのであれば、コストが安い国、あるいは優遇措置が充実している国から切り替えていくことも可能だと思います。

**KM** 省エネに関しては、生産拠点での施策が最も効果的ですが、再生可能エネルギーへの転換という観点では、それ以外の拠点にも目を向ける必要がありますね。2010年3月、ベルギーの販売会社が、グループ内で初めて大規模な太陽光発電設備を導入しましたが(▶P22)、今後も各国の動向を見ながら導入を検討して行きます。

### 化学物質リスクの低減について

**高見** ナチュラルステップでは、「自然の中で人間社会の作り出した物質の濃度が増え続けられない」ということを、持続

可能な社会の原則の一つとして定義し、自然の中に難分解な物質が増え続けることに企業が加担しないことを目標にするよう提言しています。EUの化学物質政策も、長期的には難分解な物質の使用を全て禁止する方向性にあるため、規制が今後さらに強化されることは確実です。それゆえ、プロアクティブに、分解されにくい物質は使わないという将来像を見定め、それに向けて使用物質を転換していくという発想が必要です。一度に転換することが難しい場合は、サプライヤーと協働してより害の少ない物質に代替しながら、ステップバイステップで対策をとることが必要です。

**KM** CO<sub>2</sub>削減については、バックカスティング<sup>※</sup>の重要性をよく聞きますが、化学物質についても、同様の長期的な視点が必要ということですね。

### 生物多様性への対応について

**高見** 生物多様性の保全に最も貢献できるのは、本業の中での対策です。コニカミノルタの場合、主力事業は複写機などの情報機器ですから、お客様に提供する紙の原料が、適正に管理されている森林から調達されていることが最も重要だと思います。商社から購入しているものなどは原産地がつかみにくいですが、CSR活動においては、「わからない」ということがリスクになるという認識が必要ですね。

**KM** 生物多様性については、事業活動との関連性評価を終えて、具体的な取り組みを検討しているところで(▶P18)。紙の調達基準についても、生物多様性の観点で再点検することがテーマにあがっていますが、それを最優先課題として取り組んでいきます。

<sup>※</sup> バックカスティング：将来のあるべき姿、ゴールを描いて、そのゴールから現在までを振り返って、今後にとるべき行動を明らかにする考え方。

# 第三者意見

本レポートに対して、上智大学経済学部教授 上妻義直氏に、第三者の立場からご意見・ご要望をいただきました。ご提言は、今後のCSR活動および次年度のレポートに活かしてまいります。



上智大学経済学部  
教授  
上妻 義直 氏

## 1. 持続可能なビジネスモデル

コニカミノルタのCSR活動を特色づけているのは「新しい価値の創造」という経営理念を基軸とした環境適応型のビジネスモデルづくりです。とくに、有機材料技術を活かした省エネ・省資源な製品開発による新規事業の創出というビジネスの方向性は、本業に新時代の社会的価値観を吹き込む取り組みであり、報告書を読む者に持続可能な社会の実現に向けた同社の夢を伝えてくれます。

この将来ビジョンをエコビジョン2050や中期環境計画と並行して達成するために、事業戦略とCSRマネジメントの一体的な遂行が期待されます。

## 2. CSRマネジメントのサプライチェーン展開

もう1つの評価ポイントはCSRマネジメントのサプライチェーン展開です。コニカミノルタでは、環境マネジメントシステムのパフォーマンス管理ともいべき生産拠点のグリーンファクトリー認定制度を中核に、サプライチェーンの

川上に向けてはCSR調達と製品安全教育/リスクマップという管理ツールを配置し、川下には定期的な顧客満足度調査と市場品質速報データベースによる「顧客の声」情報の環流ルートを構築しています。これらによって、サプライチェーン全体で一元的なCSRマネジメントを可能にする体制が整備されつつあるのです。

この体制が有機的に機能して実効性をあげられるように、個別の取り組みの連動性に配慮しながら全体最適化が図られるような運用が望まれます。


## 3. 社会情報の改善

環境面における取り組みのすばらしさと比較して、社会面には改善の余地があるように思います。たとえば、コニカミノルタのようにCSR報告書を多言語で作成する多国籍企業ならば、雇用情報もグローバルベースで拡充すべきでしょうし、ユニバーサルデザインなどの技術的側面で障がい者支援に取り組むならば、日本で慣行化しつつある障がい者雇用率についても言及が望まれます。

もちろん、今年度から詳細になった両立支援制度の利用状況や新たに開示が始まった過重労働の防止に関する情報のように、社会面の取り組みにも一定の改善は見られます。ただし、これらについても、両立支援制度の利用状況を労災データ同様に経年変化が見える表示形式にしたり、超過勤務関連情報を定量開示するなどの工夫は可能です。また、とくに過重労働問題は、労働時間管理を徹底するとサービス残業を誘発して状況を悪化させる場合がありますので、慎重な取り組みが望まれる事項です。

# 第三者保証

本レポートに記載されているCO<sub>2</sub>排出量およびエネルギー使用量が、コニカミノルタが定める基準に従って把握、集計、開示されているかについて、KPMGあずさサステナビリティ(株)による保証を受けました。



**独立保証報告書**

2010年5月31日

コニカミノルタホールディングス株式会社  
取締役会 御中

KPMG あずさサステナビリティ株式会社  
東京都新宿区律久、戸町1番2号

代表取締役社長 **魚住 隆太**  
アシスタンス事業部長 **斎藤 和孝**

**目的及び範囲**

当社は、コニカミノルタホールディングス株式会社(以下、「会社」という。)からの依頼に基づき、会社が作成したCSRレポート2010(以下、「CSRレポート」という。)に対して限定的保証業務を実施した。本保証業務の目的は、CSRレポートに記載されている2009年4月1日から2010年3月31日までの対象としたCO<sub>2</sub>排出量及びエネルギー使用量(以下、「指標」という。)が会社の定める基準に従って作成されているかについて保証手続を実施し、その結論を表明することである。CSRレポートの記載内容に対する責任は会社にあり、当社の責任は、限定的保証業務を実施し、実施した手続に基づいて結論を表明することにある。

**判断規準**

会社はエネルギーの取用の合理化に関する法律、地球温暖化対策の推進に関する法律、「温室効果ガス排出量算定・報告マニュアル」(2009年 環境省、経済産業省)及び「The Greenhouse Gas Protocol: A Corporate Accounting and Reporting Standard」(2004年 WRI/WBCSD)を参考にして定めた指標の算定・報告基準(以下、「会社の定める基準」という。)に基づいて指標を算定しており、当社はこの会社の定める基準を指標についての判断規準として用いている。

**実施した保証手続**

当社は、サステナビリティ情報審査協会のサステナビリティ情報審査実務指針(2008年2月改訂)及び国際監査・保証基準審議会(ISA)3000「過去財務情報の監査又はレビュー以外の保証業務」(2003年12月改訂)に準拠して本保証業務を実施した。本保証業務は限定的保証業務であり、主としてCSRレポート上の開示情報の作成に責任を有するもの等に対する質問、分析的手続等の保証手続を通じて実施され、合理的保証業務ほどには高い水準の保証を与えるものではない。

当社の実施した手続には以下が含まれる。

- CSRレポートの作成・開示方針についての質問
- 会社の定める基準の検討
- 指標の把握、集計、開示のためのシステム並びに会社及びサイトレベルでの内部統制の検討
- 全社集計データに対する分析的手続の実施
- 会社の定める基準に従って指標が把握、集計、開示されているかについて、試査による原始証拠との照合並びに再計算の実施
- 日野サイト、八王子サイトにおける現地往査
- 指標の表示の妥当性に関する検討

**結論**

上述の保証手続の結果、CSRレポートに記載されている指標が、すべての重要な点において、会社の定める基準に従って作成されていないと認められる事項は発見されなかった。

当社及び本保証業務に従事したものと会社との間には、サステナビリティ情報審査協会の倫理規程に規定される利害関係はない。

以上

実施期間：2010年3月～5月



東京サイト日野での現場確認



資料の確認

## 保証業務を実施して

製品使用に伴うCO<sub>2</sub>排出量をはじめとする「スコープ3排出量※」の貴社グループにとっての重要性を認識し、それを含めてCO<sub>2</sub>排出量の目標設定が行われています。さらに、「中期環境計画2015」の初年度である今回の報告から、データの算定範囲や算定方法をより詳細に報告したり、エネルギー使用量やCO<sub>2</sub>排出量に対して第三者による保証を受けたりするなど、開示情報の信頼性と透明性の向上に努められています。

他方、生産や販売に伴うCO<sub>2</sub>排出量は、生産工場や日本国内の販売拠点で毎月システムに入力されるエネルギー使用量に

KPMGあずさサステナビリティ株式会社 菅生 直美 氏

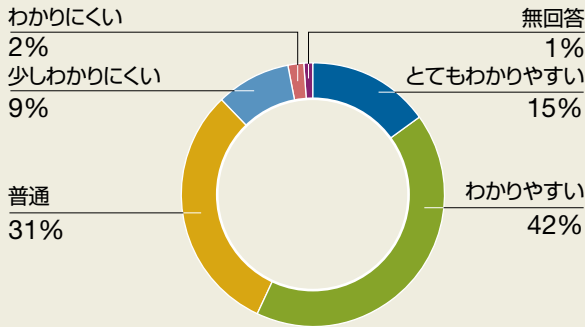
基づき算出されますが、異常値を適時に効果的に発見できる仕組みが十分に確立されていません。入力されたデータについて適時に分析を行い、使用量の増減が大きい場合は理由の報告を求めるなどの仕組みづくりが必要と考えます。また、「スコープ3排出量」である物流に伴うCO<sub>2</sub>排出量は、個々の事業会社からの報告データに基づき集計されますが、算定方法が統一されていない部分がありますので、統一が望まれます。

※ スコープ3排出量：直接排出量(スコープ1)と電力などの使用に伴う間接排出量(スコープ2)を除く、その他の間接排出量

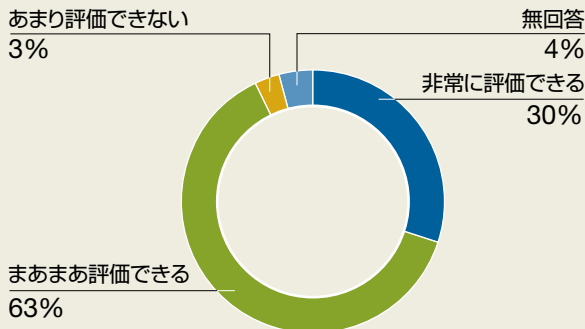
# 「コニカミノルタCSRレポート2009」アンケート結果

2009年度版のCSRレポートについて、合計290名の方からご回答をいただきました。  
お寄せいただいた貴重なご意見は、CSRレポート制作および今後のCSR活動に活かしてまいります。

## レポートのわかりやすさ



## コニカミノルタのCSR活動について



## いただいたご意見から

### レポートについて

- 全体像が見えにくい。体系が把握できる工夫がほしい。
- 個々の取り組みについてもっと具体的な事例を紹介してほしい。
- お客様満足向上への取り組みの記事は、事業ごとの特色が表現されていて、興味深く読んだ。反面、表面的で、もっと入り込んだ部分も知りたいと感じた。
- コニカミノルタ自身がまだ課題と考えている項目について、第三者の意見としてそれを挙げるだけでなく、会社としての見解を記述すべきと思う。

### コニカミノルタのCSR活動について

- 最先端技術の取り組みや社会的テーマの将来展望を知りたい。
- 将来に向けた環境技術への貢献を期待している。
- 使用済み製品のリサイクルについての方針を示してほしい。
- さらに医療関連の製品開発を進め、事業を通じて社会に貢献してほしい。
- “コニカミノルタらしさ”が感じられる活動があるとよいと思う。

## SRI(社会的責任投資)調査機関の評価

コニカミノルタホールディングス(株)は、2010年1月、世界の代表的なSRI評価会社、SAM(Sustainable Asset Management)社によるCSR格付で、「シルバークラス」に選定されました。



SAM社は毎年、世界約2,500社を対象に、経済、社会、環境の側面から企業の持続可能性についての評価を行い、とくに優秀な企業を「ゴールド(金)」「シルバー(銀)」「ブロンズ(銅)」のクラスに分類しています。2010年1月の発表によると、97社がゴールド、84社がシルバー、65社がブロンズの評価を受けています。

なお、コニカミノルタは現在、英国のFTSEグループによる「FTSE4Good Global Index」、米国のダウジョーンズ社とスイスのSAM社によるDJSI(Dow Jones Sustainability Index)2009のAsia Pacific部門、日本のモーニングスター社による「モーニングスター社会的責任投資株価指数」(MS-SRI)、それぞれの構成銘柄に選定されています。また、ベルギーに拠点を置く社会的責任投資の推進団体フォーラム・エティベルの「Ethibel Pioneer」および「Ethibel Excellence」の投資ユニバースに選定されています。(選定状況は、2010年5月1日現在)

